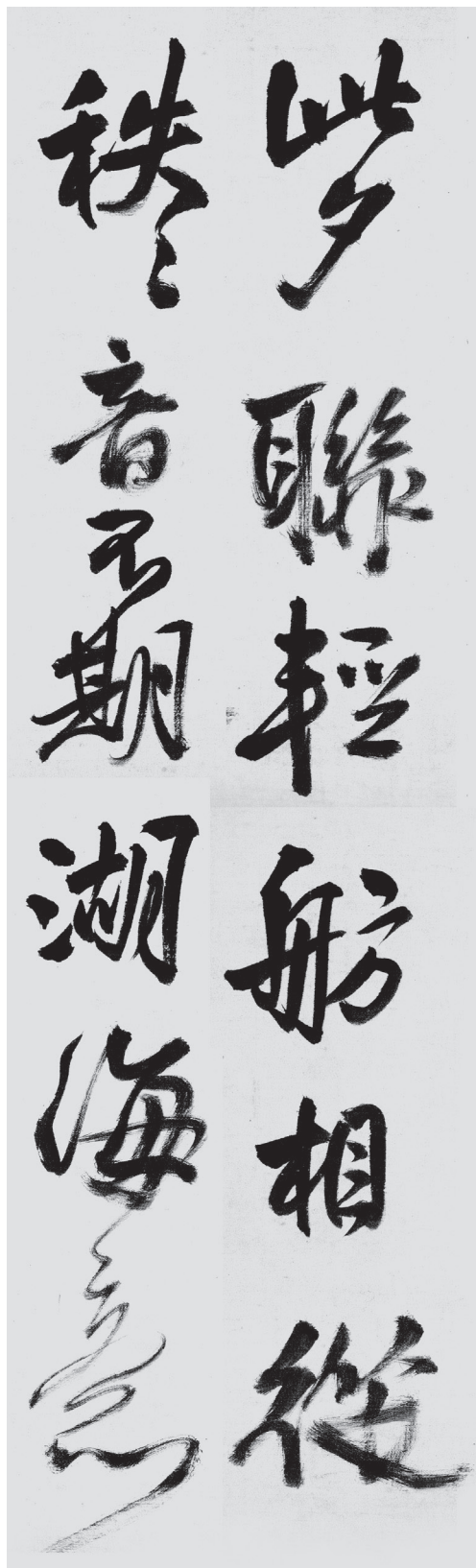




此夕聯輕舫。相從秩々音。不期湖海意。
此の夕^{ゆふ}輕舫^{けいぼう}を聯ね、相い從う秩々^{ちちちち}の音。期せず湖海の意を、

中国法書選『王鐸集』（二玄社）

※昇試随意部参考（半紙・条幅）としてもご活用下さい。字詰め自由。抜粋可。

一字書（三月二十二日締切）

課題

建

- (1) 書体自由
- (2) 半紙タテ ※ヨコは中止
- (3) 落款は余白に調和を工夫し書き入れる
- (4) 出品料 四四〇円
- (5) バーコード券貼付 太枠内の臨昇の隣の空欄に
一字と記入 段級は無記入

字典の紹介

（主に毛筆用）

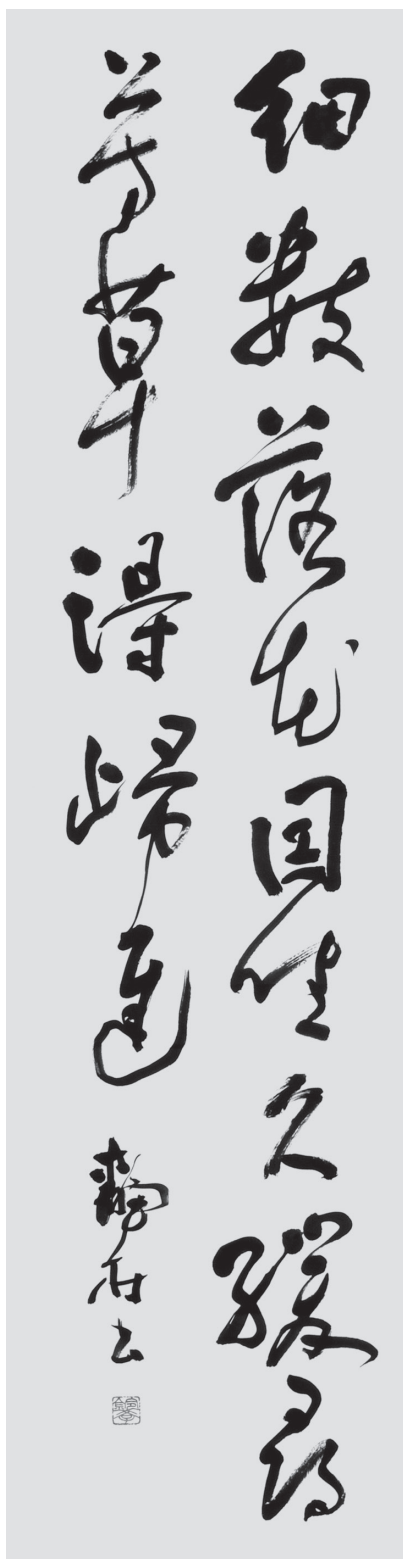
- 『新書源』^{しんしゅげん} 出版社 二玄社
A5版 一四二六ページ
定価 九、七九〇円（税込）
- 『五體字類』^{ごたいじるい} 増補改定版
出版社 法帖図書出版 西東書房^{さいとう}
B6版 七六〇ページ
定価 三、八五〇円（税込）

昇試第一部漢字課題

(三月二十二日締切)

A 鈴木静村先生書

細數落花因坐久 緩尋芳草得歸遲 (王安石)
細やかに落花を数えて坐に因ること久しく、緩やかに芳草を尋ねて帰を得ること遅し。



B 高橋香樹会長書

筆力を強く、馬力を前面に仕上げてほしい。特に「落花」「因坐」の連綿線は、弛まぬように。左行「帰」の終画はこの字の主画、もう少し強く。「因」の「工」は篆書から。「尋」の草書体、崩しポピュラー覚えておかれたし。



今回の課題は「草冠」の漢字が四字ある為、その四字を書き分けるのは苦勞するかと思います。「花」は「華」を使用する。「懸針」が二字となり、その「懸針」の用筆も変化させるようにしました。墨継ぎは「坐」と「草」。

訳：長く座って花の落ちるのを細やかに数えている。のんびりと芳しい草を訪ねて帰るのが遅くなる。

予告 (四月二十二日締切)

蘭在幽林亦自香 (劉禹錫)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第一部かな課題

(三月二十二日締切)

学び方

○半切という舞台を『上・下二段に分けて書く』シリーズの最終回です。「五・七」を上段に、「五・七・七」を下段に配しました。
○たてを二等分した上段にたったの二行。文字を多少大きく目にし、行間もゆったりとりました。下段は、その上段を支えるように墨量を意識しながら、小さ目の文字を強い線で書き進めましたし、行間も狭くして密(かたま)り)になるようにしてみました。

更に下段の行頭(け・室・わ・ら)の位置を少しずつ下げて、そこのできる空間を楽しみました。
『上・下二段に分けて書く』ためには、
①紙面の全体構成を考える。
②上・下段の関連性を考える。
③上段と下段の間に生じる空間の扱いを考える。などに注意するとよいでしょう。楽しんで書いてください。

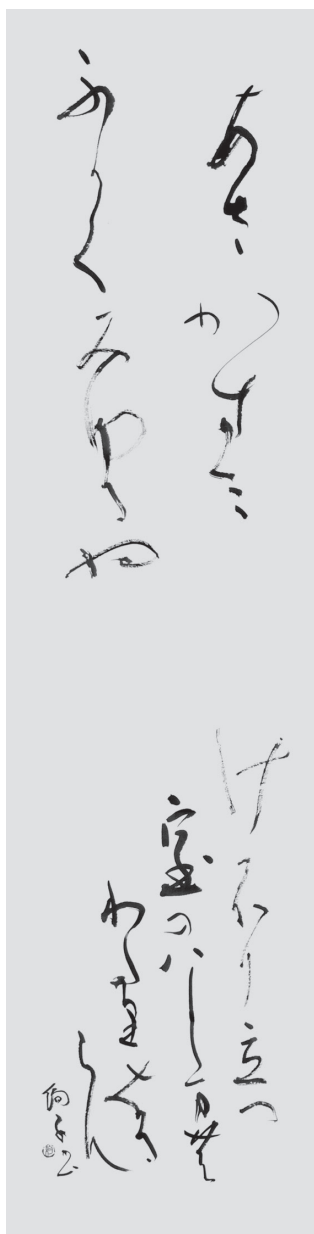
予告 (四月二十二日締切)

春雨はいたくなふりそ桜花まだ見ぬ人にちらまくをし(新古今和歌集 山部赤人)

B

宮 絢子先生書

あさかす三ふ可久みゆるやけ不り立つ室の八し万農万多里奈るらん

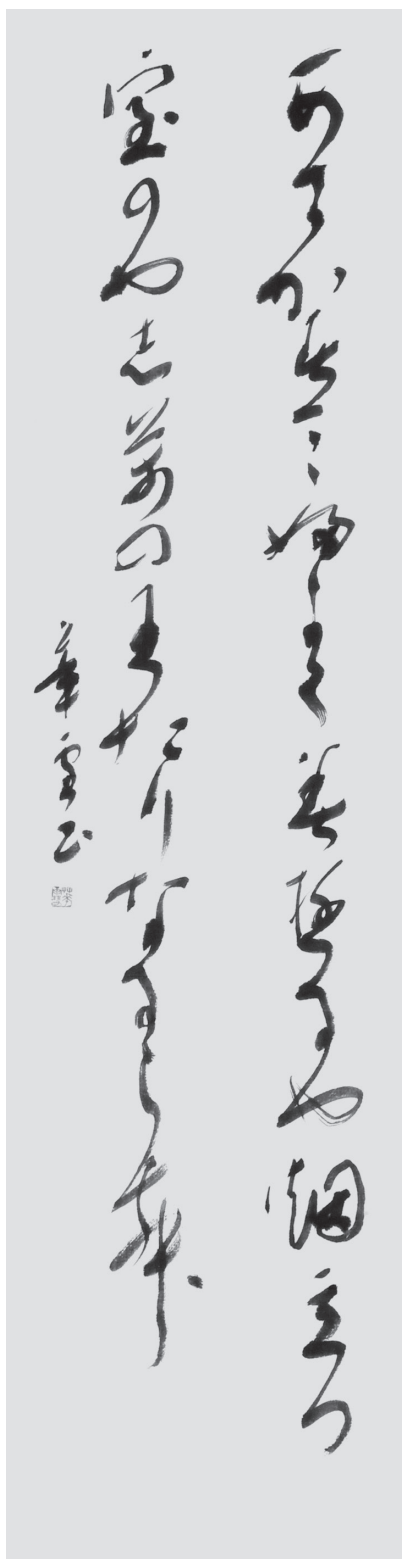


作者 藤原清輔は、百人一首84番「長らへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき」の作者である。父は歌人藤原顕輔であり、百人一首79番「秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ」の作者である。親子ともに当時の歌壇の指導者である。

A

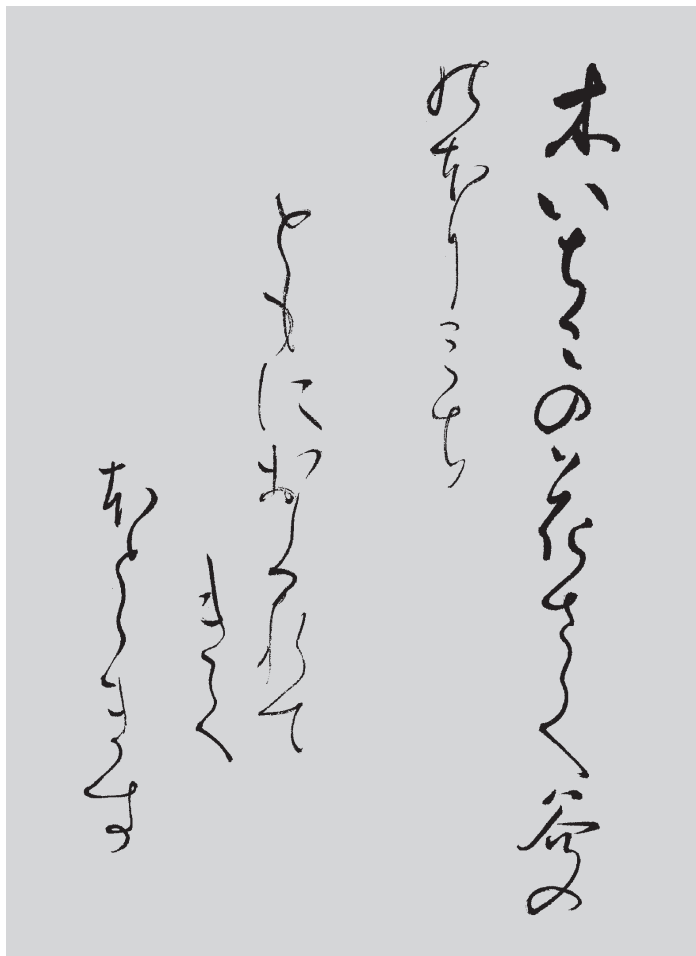
平岡華雪先生書

あさ霞ふかく見ゆるやけぶりたつ室の八島のわたりなるらん(新古今和歌集 藤原清輔朝臣)
あさか春三婦可久美遊るや烟立つ室のや志萬の王たりなるら舞



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

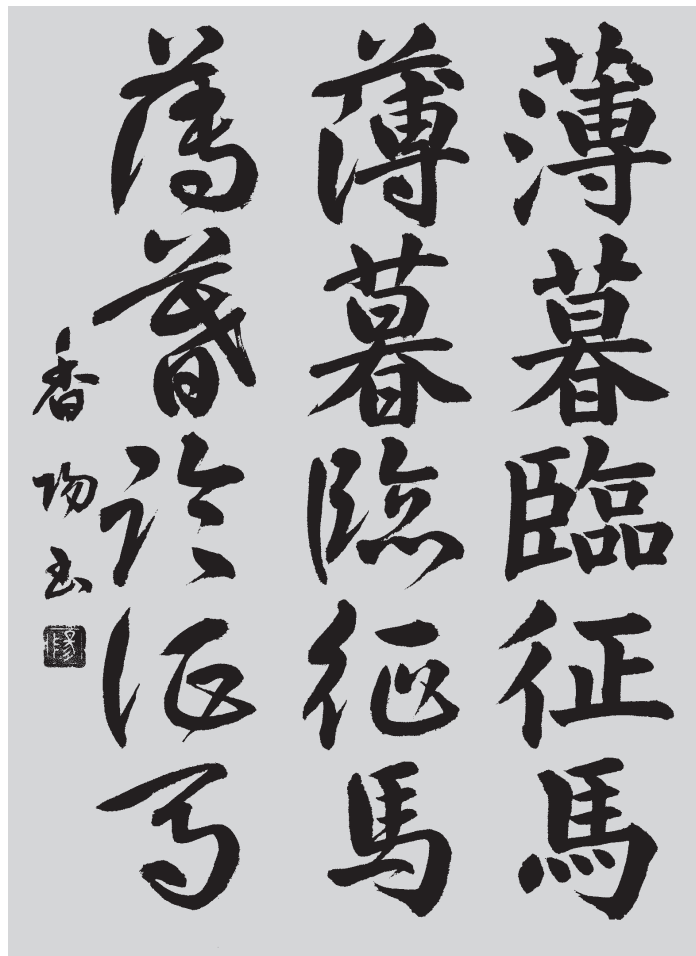
昇試第二部かな課題 (三月二十二日締切)



高塚竹堂先生書

木いちごの花さく谷のぼり道ともにおくれてきくほととぎす (加藤義清)
木いちごの花さく久谷の能本り三ちともにおくれてき久本とゝきす

昇試第二部漢字課題 (三月二十二日締切)



福田香陽先生書

薄暮臨征馬 (王褒)

薄暮 征馬に臨み

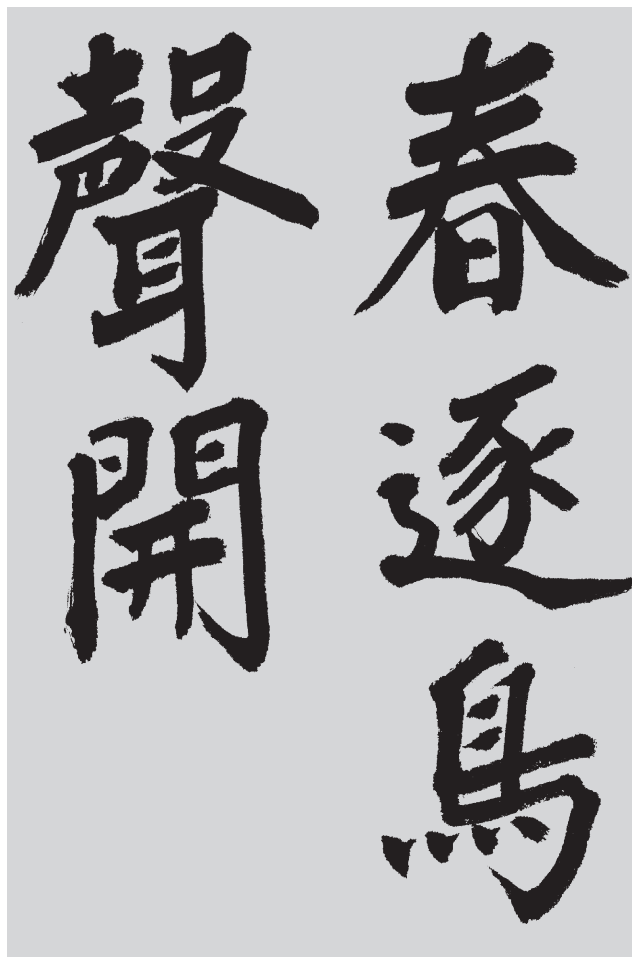
訳：夕暮れ近く馬を進めていると、(北方の山ふところで道に迷って、とうとう帰れなくなった。)

平岡華雪先生書

春は鳥声^おを逐^おって開く。(太宗)
訳：春が鳥のさえずりと共にはじまる。

〈分間の処理・短横画は弾みよく〉
五文字それぞれが分間の処理に留意して。「春・鳥・聲・開」の中に入れる分割の画は軽く用筆して明るくすっきりと。弾みを入れると、リズム的になります。

昇試第三部漢字課題 (三月二十二日締切)



(4月22日締切) 夢與落花飛(陳文述)

平岡華雪先生書

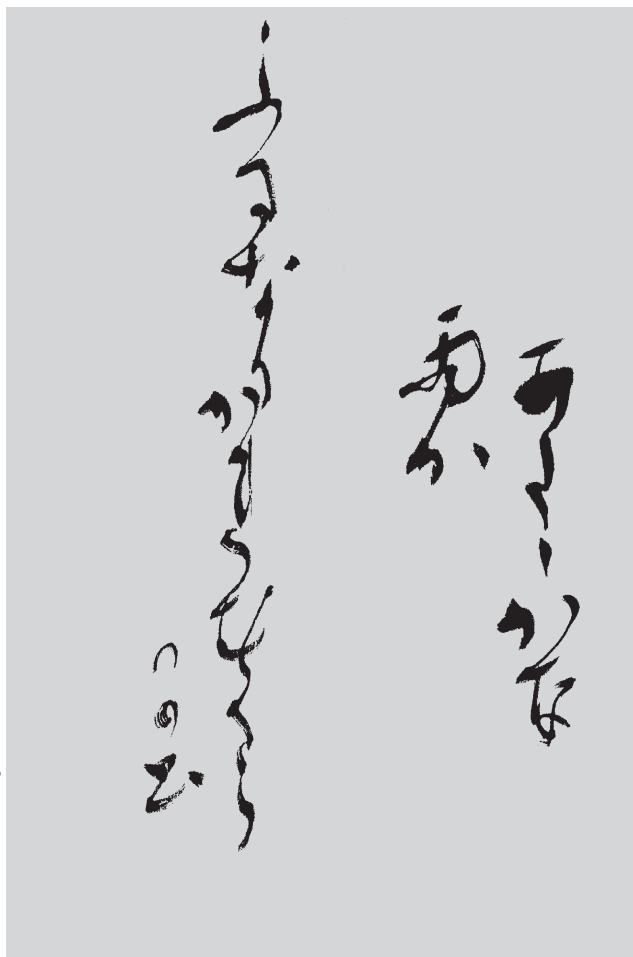
あたゝかな雨が降るなり枯^{かれむぎ}律

あ多^たゝかな雨かふるなりか連^れむくら

(子規)

〈弾みの用筆―特に初歩段階者〉
かな用筆の基本用筆の「弾み」が多く使われています。「あ・雨」の第一筆、「多ゝか」では、スポツという感じの線が連続しています。「ふ」の第一筆も弾み、筆毛の弾力を軽快に、リズムに乗せて運筆するように練習で深めて下さい。

昇試第三部かな課題 (三月二十二日締切)



(4月22日締切)

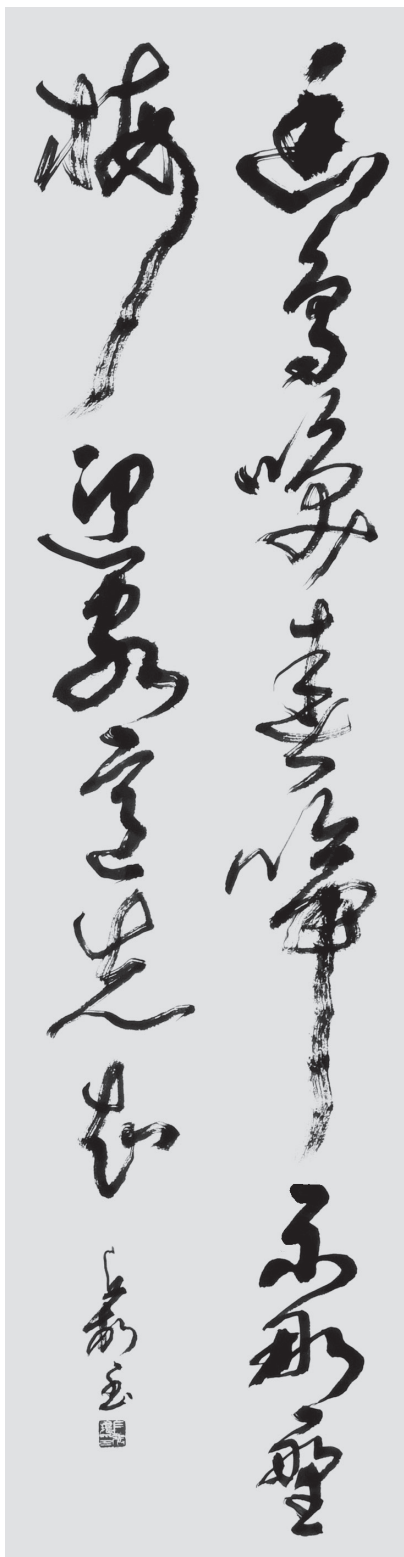
春をしむ人や落花^{はな}を行^なもどり(召波)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇 試 随 意 参 考

戸 張 丘 邨 先 生 書

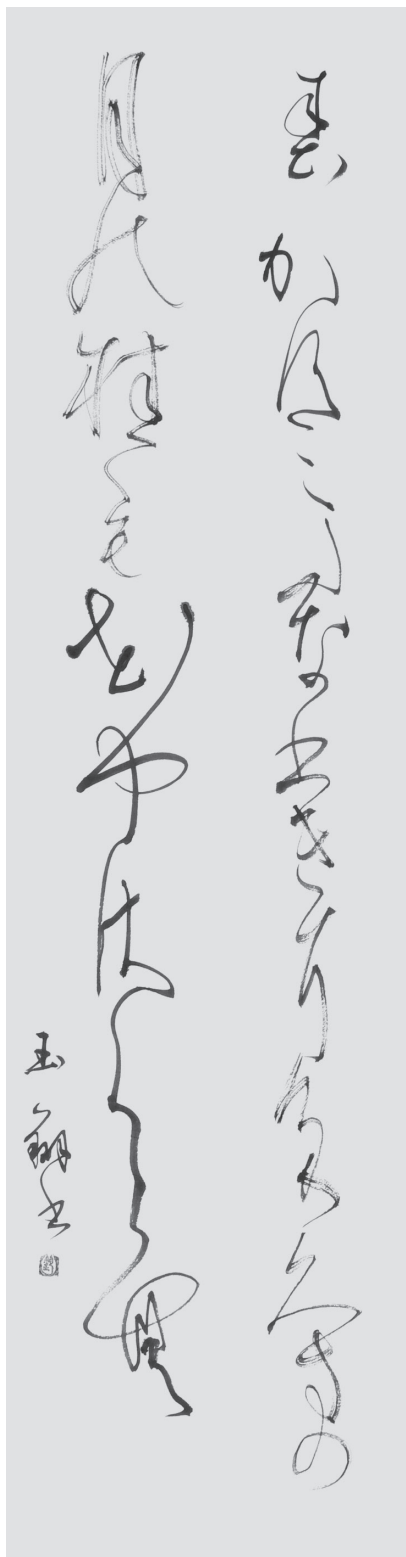
幽鳥喚春啼不那 野梅迎客意先知 (傳察)
幽鳥春を喚び啼いて那ともせず、野梅客を迎え意先ず知る。



訳：静かに鳥は春を呼んでおれどいかんともせず、野べの梅花は訪いくる客を迎えて意中をまず知っている。

福 田 玉 翔 先 生 書

春がすみたなびきにけり久方の月の桂も花やさくらむ (紀貫之)
春か須三多な悲き耳介利久方の月能桂毛花や佐久ら無

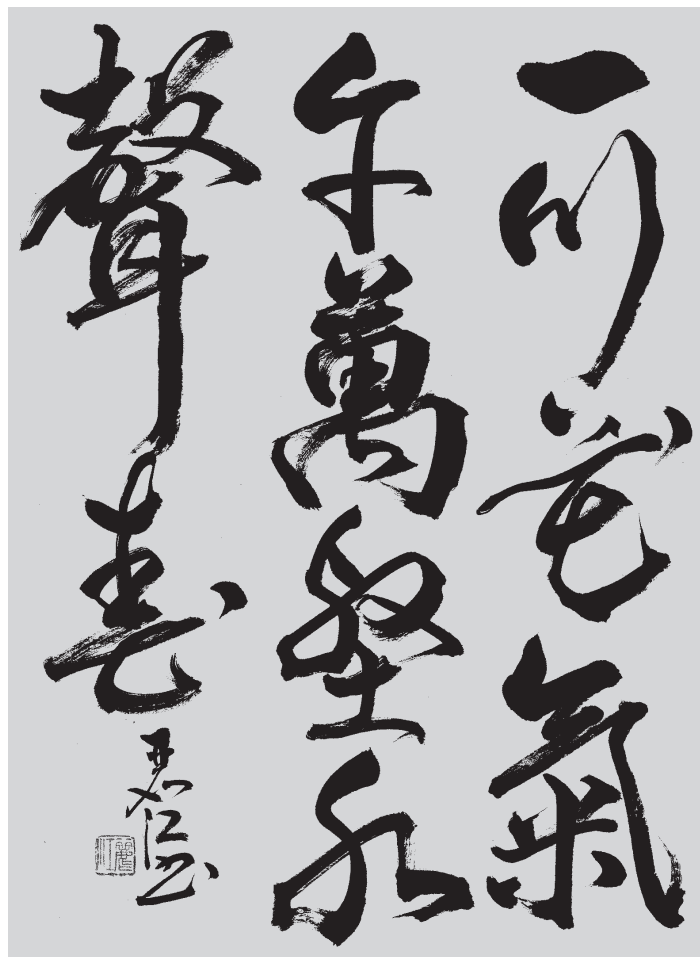


訳：春が来て、空には霞がたなびいている。(ひさかたの) 月の中にあるという桂の花も、いまは咲いているであろうか。

◆注 意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

吉岡麗江先生書

一川花氣午 萬壑水聲春（杜仁）
 いっせんかきご ばんがくすいせい はる
 一川花氣午に、万壑水声の春。

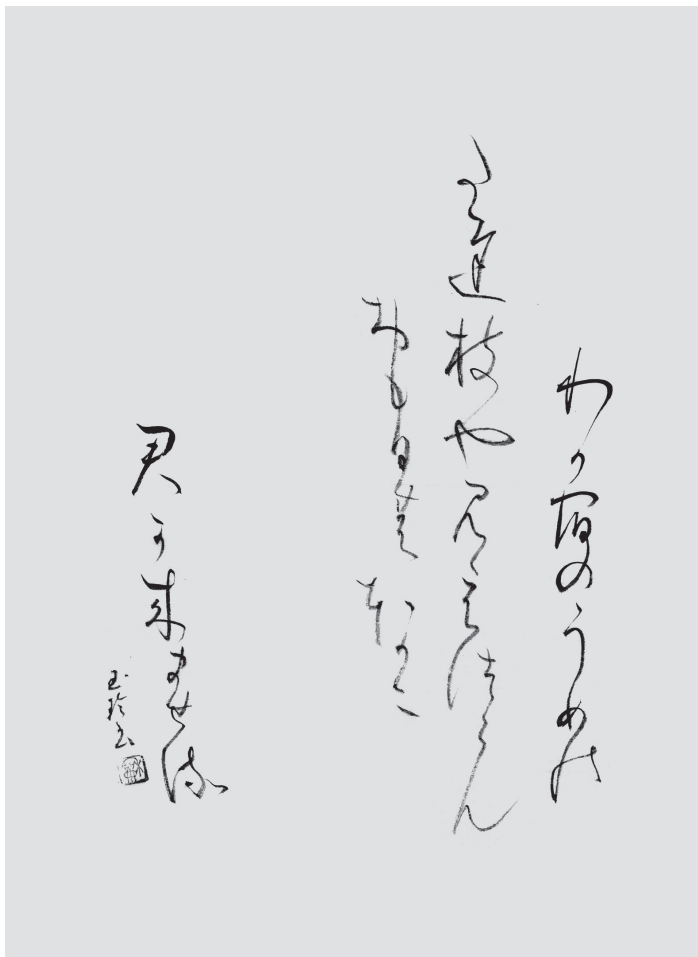


昇試随意参考

訳：川一面の花はちょうど正午で多くの谷川の水の音までが春らしい。

大和田玉玲先生書

わが宿^{やど}の梅^{うめ}の立枝^{たちえ}や見えつらん思^{おも}ひのほか^{ほか}に君^{きみ}が来^きませる（平兼盛）
 わか宿^{わか}のうめ能多遅枝^{ねだち}や見え徒^たらんおも日農本可^{ひのほんか}二君可来ませ流^{にきんかきりゅう}



昇試随意参考

訳：思いもかけずあなたがおいでになったのは、わが庭の高くのびた梅の枝が外にみえて、花を見過
 ごしがたさに立ち寄って下さったのだろうか。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部課題参考

(三月二十二日締切)

赤木典子先生書

石原春香先生書

課題2 (初段格以下)

課題1 (初段以上)

軒から小屋にはいこんで、雪の穴に
火を焚きながら吹雪の一夜を明かす
と、春はまったくかげをひそめた。

吉野梅郷の散策でいたいへん
吉野話になりかゝる厚くおれ申す
とげあす 五月の連休には鎌倉の
天園ハイキングを計画してあす

課題1 (初段以上)

吉野梅郷の散策でいたいへん御世話になりました 厚くお礼申し上げます
五月の連休には鎌倉の天園ハイキングを計画しています
(手紙文)

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (2) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位に)次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (3) 会員は無料・会員外は四六〇円

課題2 (初段格以下)

軒から小屋にはいこんで、雪の穴に火を焚きながら吹雪の一夜を明かすと、春はまったくかげをひそめた。
(『春の槍から帰って』板倉勝宣)

※はいこんで…這いこんで(身をかめて入っていく様子)